倫風宏話

明けましておめでとうございます

上廣榮治

元日や　はれて雀の　ものがたり　　嵐雪

松尾芭蕉に師事した服部嵐雪の、穏やかで温かい元旦の句です。昨日まで、あれやこれやと気ぜわしい日々を送っていたのが、一夜明けると一点の雲もなく晴れ渡った元日で、軒端の雀のさえずりも新鮮で何やら楽しげに聞こえます。

新しい年を迎えるときに、いつも思い浮かぶ句がもう一つあります。嵐雪の句とは対照的な一句です。

去年今年　貫く棒の　如きもの　　高浜虚子

一月一日の午前零時を境に、去年と今年は一瞬のうちに転換します。しかし、そんな時の流れの底には、年が改まったからといって変わらない、棒のように真っ直ぐなものが貫いているというのです。わずか十七字のなかに、大河が滔々と流れていくような、どっしりとしたいい句です。

「棒の如きもの」とは、私たちにとっては実践倫理の大道であります。それは、年が改まったからといって、途切れたり変わったりするものではありません。元日といえども、昨日に変わらぬ「今日一日の実践」が続いていきます。

では、大道を歩もうとする者にとって、正月もただ時の推移にすぎないのでしょうか。正月を祝い、気持ちを新たにすることは無意味なこと、取るに足らないことなのでしょうか。もちろん違います。

新しい年のとば口に立った私たちは、これを機会に来し方を顧み、行く末を見据えて、心機一転、新たな一歩を踏み出していくのです。だからこそ、お正月はすべてが清々しく新鮮に思えるのです。

同じような感慨を、情熱の歌人与謝野晶子が大正十二（一九二三）年の元旦に書いています。「人間の若さ」と題した随筆です。

随筆は「元旦に汲む水を若水と云うのは優美な言葉の中によく此朝の気分を現している」という一文で始まります。優雅さとともに元旦のきりりとした清々しさが伝わってきます。

続けて晶子は書いています。「除夜と元旦、ただ一夜の変化で我々の気分は新鮮になる」。もし、そうならないとしたら、「老いて血管の硬化したように心もまた自由な躍動を失った」証拠である。なぜなら、「感情の熱を常に心の底に湧き立たせている人は……いつまでも子供のように元旦が嬉しくてならない」はずだからです。

だから、お正月は、歳を重ねたことよりも、「若さを常に持っていることの方がめでたい」というのです。そして、その「若さ」とは、年齢に関係なく、「その人の生命が貯えている豊富な生長力――生きようとする力そのものである。言い換えればどんなに伸びて行くか知れない子供心である」と晶子は言います。

これを我が会流にいえば、「若さ」とは「倫理力」と「実践力」だということになるでしょう。倫理力を曇らすことなく、実践力を発揮し続けるかぎり、実践者として老いることはないということです。

さらに晶子は、「若さの前に不可能も無ければ、陰翳も無い、それは一切を突破する力であり、一切を明るくする太陽である」と若さを礼讃します。倫理力の発現である実践こそ、「一切を突破する力」なのです。

与謝野晶子がこの「人間の若さ」を書いた年の九月一日、関東大震災が襲います。震災で富士見町にあった晶子の家も焼失しました。なかでも彼女にとってショックだったのは、およそ十年の歳月をかけて書きためた『源氏物語』の現代語訳の原稿一〇〇〇枚が焼けてしまったことでした。晶子四十六歳のときです。

伝記によると、晶子はくよくよしない女性でした。この随筆の中でも、「悲観、泣き言、不平、皮肉、非難、諦め、などに心を分つ大人があれば、それは既に若さを失い、老衰の域に入った兆候である」と、「無駄心」を戒めています。

それにしても、十年の労作が灰燼に帰したのです。彼女も一時は絶望に打ちひしがれたに違いありません。しかし自らを励まし、再び一から挑戦します。そして十七年後、ついに『源氏物語』の全訳を完成させたのでした。それこそ晶子の「精神の若さ」がもたらした「一切を突破する力」によるものでした。

晶子が与謝野鉄幹と出会ったのは明治三十三（一九〇〇）年、二十三歳のときでした。以来、慕情を育んで結婚、二人は十一人の子を授かりました。五十八歳で最愛の夫を失った晶子は、歌を詠みます。

冬の夜の星君なりき一つをば
言うにはあらずことごとく皆

一つの星ではなく、全部の星があなた。愛と美に溢れた歌です。昭和十七（一九四二）年、六十五歳で与謝野晶子はその生涯を閉じました。家庭を守るために積極的に働き、生涯五万首の歌を詠み、学問芸術の世界に遊んで、ずっと「若さ」を保持した一生でした。

晶子が被災した関東大震災から八十八年後、東日本を巨大地震と大津波が襲い、原発事故まで起こりました。この経験を「第二の敗戦」と呼んだ人もいます。津波に襲われた街は、空襲で焼け野原と化した街を思わせ、原発の爆発事故は、広島や長崎への原爆投下を想起させたからです。

今度の災害は天災であるとともに、人災でもありました。原発の被害をこれほどまでに深刻なものにした原因は明らかです。金銭を至上のものとして、安全よりも利益や経済効率を優先したからです。自然に対して傲慢であったからです。「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」です。

いま私たちは、新たな一歩を踏み出さなければなりません。皆さんもご承知のように「共生の理想」を目指す一歩です。いま困難の渦中にある人々のために、いま何ができるかが、一人ひとりに問われています。

もちろん、自分自身の困難や悩み、心配事を抱えている人も少なくないでしょう。そんな場合の心の構えこそ「現実大肯定」です。うろたえたり、落ち込んだりする「無駄な心」を排して、現実をありのままに、どんと受け止めて、しっかりと見据えることです。

そして、その問題は自分の力で解決できることなのかどうか。自分の力で解決できる部分があるのかどうか。まず、そのことをはっきりさせることです。自分の力で解決できることであれば、あるいは、自分の力で解決できる部分があれば、「気づき即行」です。自分ではどうしようもないこと、如何ともなしがたい部分については、もう「無駄な心」はつかわぬことです。

いますぐには片づかないことであれば、これからの努力次第でどうにかなることかどうかを検討します。もしも努力次第で解決できることであれば、今年の尽力を誓います。いくら努力しても成就できないことならば、目標を変えることです。

私たちは往々にして、自分にできることと、できないことを整理しないまま、悩んだり心配したりしがちです。だから解決の糸口が見えず、悩みは深くなり心配は大きくなってしまうのです。しかし、できるかできないかに問題を整理してしまえば、驚くほど身軽になって、さっぱりとした気分になるものです。

若々しく、そして清々しい気分で元旦を迎える。それが実践者のお正月の過ごし方というものです。